

「天照大神」の正体

—第1報—

塹 江 清 志

本論文においては、大和朝廷の成立に伴って生成された「神社神道」における最高神「天照大神」の正体についての検討がなされ、「天照大神」の像が、イエス・キリストが投影されたものであることが示唆された。

1. 宗教の分類

村上¹⁾は、宗教学においては、宗教を2つの軸を使って分類しているという。一つは宗教が流布している「範囲」の広さであり、他の一つは宗教の「形態」である。「範囲」については、宗教の発展は、最初はある部族で行われていたものが、宗教の成長につれて民族全体に拡大され、更には民族を越えて世界に広がっていくものである。ここから、「部族宗教」「民族宗教」「世界宗教」の3つのカテゴリーが生まれる。

「形態」については「自然宗教」「創唱宗教」の2つのカテゴリーが存在するという。「創唱宗教」とは「自然宗教」の発展したものであり、それを基盤にして、創始者がそれを理論化・体系化し、教義・教説まで整備したものである。

2つの軸を組み合わせることによって、6つのカテゴリーができる。したがって、既存の宗教を形式的には6つのカテゴリーに分類できる。しかし、創唱宗教は、前述のように教義・教説が整備されているが故に普遍的性格をもつことになる。したがって、可能性の観点から、創唱宗教は常に世界宗教である。この論理からすると、自然宗教は、部族・民族宗教であって世界宗教にはなりえないとされている。それゆえ、現実的には3つのカテゴリー、すなわち、「自然・部族宗教（未開宗教）」「自然・民族宗教（民族宗教）」「創唱・世界宗教（普遍宗教）」の3つに既存の宗教は分類されることになるという。

2. 神 道

2. 1 「自然・民族宗教」としての「神道」

「神道」は、日本民族固有のものであり、宗教の流布している「範囲」の広さの次元では、前述のカテゴリーでは「民族宗教」であり、一般的に言われている「神道」の4つの特徴としての、「創始者」のないこと・「教義」のないこと・「戒律」のないこと・「偶像崇拜」でないことなどから考えても、宗教の「形態」の次元では、前述のカテゴリーでは「自然宗教」である。従って、前述の3つのカテゴリーでは、「神道」は、「自然・民族宗教（民族宗教）」となる。

2. 2 「神道」の特徴

一般的に言われている神道の特徴は、前述したようなものであるが、宗教のカテゴリーから云えば「創唱・世界宗教（普遍宗教）」と云われている「キリスト教」「イスラム教」やこの2つの宗教の母胎となった「ユダヤ教（民族宗教）」と比較するとき、神道の特徴はよりはっきりする。宗教の本質は「神」への信仰にあるわけで、従って、「神」の性質によって、その宗教の本質的特徴が分かる。今述べた3つの宗教においては、「神」は、「超越神」「唯一神」「絶対神」「人格神」の4つの特徴を持つ。しかるに「神道」における「神」は、「自然神」「多神（八百万の神々）」である。即ち、「アニミズム」「マナイズム」の心理に基づいて、自然の全ての存在物（比喩として「八百万」という表現）に「神性」を認める結果、「八百万」という多数の「自然神」が存在するのである。

この「神観念」の違いは、もちろんそれぞれの民族のもつ固有の「民族的精神構造」の違いに由来するものであることは云うまでもないことであるが、その違いを論ずることは本論文の目的ではないのでこのことにはここでは触れない。

3. 神道の歴史の変遷

神道は、時代的に「縄文神道」「弥生神道」「神社神道」と歴史的に変遷したと云われている。同じく「神道」と呼ばれていても、この変遷には「神観念」の変化が付随するので、従って「宗教」の質の変化と考えることも出来る。

3. 1 縄文神道

縄文神道は、日本列島における最古の信仰で自然界におけるあらゆる存在に神が宿するという心理から成立した、日本人の最も素朴な宗教であると云われてきた。縄文時代は、専ら狩猟採取生活であったので、「神」は専ら、自然物（天体・山・岩・川など）や自然現象であったとされている。

3. 2 弥生神道

弥生時代に入り、農耕生活の開始によって稲作をはじめとする農耕に関連した神々も成立し、信仰の対象となってきたとされている。

3. 3 神社神道

弥生時代後期から古墳時代にかけて、遊牧騎馬民族による大和朝廷樹立に伴って「神社神道」と呼ばれるものが発生したが、縄文神道・弥生神道に比して以下の特色をもつものである。（飛鳥ら²⁾）

- (1) 祈りの場として一つの建物、即ち「神社」を建立してそこを「祈りの場」としたこと
- (2) 神社そのものの起源は、4－5 Cとされている。この時代に現在の神社の大方の形態が形成されたという。
- (3) 古い神社の殆どの創建者が天皇で、しかも崇神から応神時代までの創建が圧倒的に多いという。

- (4) 崇神天皇が神社神道の始祖として位置づけられるという。
- (5) 祀られている神が「祖先神」であること

以上のような神社神道の特色を考えると、それまでの時代の「神道」との最重要で、かつ最も本質的な違いは、「神観念」の違いである。「自然神」から「祖先神（人間が死後に神となったもの）」への変化である。宗教の本質を考えると、「神観念」が違えば宗教は別の宗教になる。にも関わらず、我々日本人は、「自然神」も「祖先神」も同じように「神観念」の中に包摂して「神道」の名称の下に、2種の「神」を歴史的に信仰の対象としてきたのである。

4. 「祖先神」信仰

4. 1 「祖先神」の成立

4. 1. 1 「カミ」と「ミコト」との関係ー「カミ」の優位性

湯浅³⁾によれば、古来の日本人の神観念においては2種類の「神」があったという。一つは「カミ」であり、他の一つは「ミコト」である。

カミとは、「自然物そのもの」である。例えば、奈良の「春日山」そのものである。この神には神社・鳥居がなかったという。

ミコトとは、カミに仕える存在であり、「人格神」（例えば、「天照大神」は「太陽（神）」に仕える存在であった）で、この神には神社・鳥居があったという。ミコトとは「神子」・「巫女」のことであるという。

したがって、始源的には、カミはミコトより上位であったという。

4. 1. 2 「カミ」と「ミコト」の関係の逆転

湯浅³⁾によれば、カミとミコトとの関係（カミに仕える関係にあるミコト）が逆転して、ミコトがカミを支配、あるいは、代行するようになったという。その理由を彼は以下のように説明する。

2世紀後半以降の気候悪化によって日本列島は寒冷化し、カミが無力化した。このことは社会の経済的發展を停滞せしめ、かつ人心の動揺を生ぜしめ社会的混乱を招いた。「自然（神）」を祈念することによって「生」を維持してきた日本民族にとっては、このことはカミの「無力化」を意味することであった。そして、2C後半以降から古墳時代にかけての人間の土木技術の発達は、当時においては、人間の自然に対する支配力の増大を意味するものであったので、カミの無力化を促進せしめた。

4. 1. 3 古墳時代以降における「祖先神」の成立

湯浅³⁾によれば、古墳時代における古墳の成立は、人間が土木技術でもって自然を制御・支配することが出来るという心理を当時の人間に生成せしめたという。このことがカミ、すなわち自然神に代わってより人間に近い、つまり、より「人格的存在」である「神」が出現したという。それが「祖先神」であったという。

4. 2 「祖先神」成立の心理的メカニズム

4. 2. 1 「自然観」の反映としての「人間観」

4. 2. 1. 1 自然に対する寄生的存在としての人間

歴史を遡るほど人類はその無力さの故にその生は一方的に自然（環境）によって規制されていた。自然にとっては、人類は寄生的存在であった。自然に対する自己の存在の在り方の矮小さ・惨めさの心理的反映として、人類は自然に対して畏怖感・恐怖感・卑屈な、あるいは卑下した心理を生成した。その結果Jung（湯浅³⁾の「太古的人間の精神構造」に記述されるような精神構造を形成した。彼は、アフリカの原住民と共に生活しそのような精神構造を観察し、「未開人の心理分析」として指摘している。

4. 2. 1. 2 「自然観」の根源性

自己の存在（の在り方）が トータルに、根源的に、そして、究極的に自然によって規制されるということは、自己の存在（の在り方）にとって自然との関係がその全てであることになる。人間の個体発生においては、原初的には 彼の存在（の在り方）にとって、母との関係がその全てであるのと同じである。したがって、人類が自己の生を育んだ自然（環境）を認識した結果としての「自然観」が、彼のその後の生における全ての対象・事象に対する認知様式を根源的に規定すると考えられる。人間の個体発生において 乳児期における母との関係において形成される世界観（特に他者・自己に対する認識の在り方）が、その後の彼の人生における全ての対象・事象に対する認知様式を規定するのと同じである。

4. 2. 1. 3 「自然観」の反映としての「人間観」

前述のことから人間観（人間に対する見方・考え方）も自然観（自然に対する見方・考え方）によって根源的、そして原初的に規定されるといえる。

4. 2. 2 「自然」との（に対する）「一体感」「自然観」としての「一体感」・「断絶感」

塹江ら⁴⁾は、「精神構造の規定因としての「自然」」において以下のことを述べている。

(1) 「民族的精神構造」(木村⁵⁾)の根源性

(2) 「民族的精神構造」はJung(河合⁶⁾)の「民族的無意識」と同じである

(3) 「民族的精神構造」の生成因は、その民族の生を歴史的に育んだ「自然(環境)」である。

そして 塹江ら⁷⁾は「風土論的精神構造論」において以下のことを述べている。

(1) 日本の自然は古来から日本民族の生を歴史的に受容してきた。その結果、日本民族の民族的精神構造は、「一体感」である。それは、日本人の自然との（に対する）一体感、あるいは自然観としての一体感より由来する。

(2) 西欧の自然は古来から西欧民族の生を歴史的に拒否してきた。その結果、西欧民族の民族的精神構造は、「断絶感」である。それは西欧人の自然との（に対する）断絶感、あるいは、自然観としての断絶感より由来する。

4. 2. 3 「自然神」の成立

世界の諸民族は、始源的には、自然神信仰であったという。未開人の心理としてのアニミズム・マナイズムの心理が存在する。すなわち、自然には心・霊が存在し、人間の心に応答してく

れるという心理である。前述したような日本民族の自然に対する一体感の存在を考慮すれば、この心理は、日本民族において最も顕著になる。諸々の自然物（太陽・月など）を神に見立てて、自然神信仰によって、すなわち自然（環境）の中で神の掟（自然の掟）を遵守することによって、生を確保しようとした。自然神信仰の成立である。

歴史的、そして、相対的に見て、日本列島ほど人類の生を許容する場所はなかった。そこで生を営んできた民族には「自然＝神」の観念が最も顕著になる。その結果、「八百万の神々」の成立に至るのである。あらゆる自然物の一つ一つに神が宿るのである。そして、それらの神々は人間（の「甘え」）に対して応答してくれるので、人間は、「念ずるだけ」でよいのである。

4. 2. 4 「祖先神」の成立のメカニズム

前述したような自然神の根源性を考えると、各民族の抱く自然観は、その民族の人間観を規定する。そして、「自然＝神」という観念が最も強い日本民族においては、「人間＝神」という「人間観」が生成される。「人」という言葉の原義には「カミ」という意味が含まれているという（宮家⁸⁾）。

そして、「祖先神」成立の心理的メカニズムについて、筑波⁹⁾は以下のように云う。

現実に生きている人間の行動を見ていると、どう見ても神のように思われたい。そこで次のように考えた。「生きている人間」の場合、その精神には「神の心」、即ち、霊・靈魂・魂が宿っているが、肉体には「人間の心」、即ち、肉欲が宿っていて、それが邪魔して生きている人間は神のような振る舞いをしない。しかし、人間が死ぬと、肉体は消滅するが、神の心は、身体の外に出て靈魂となって存続する。（民俗学の知見では、昔は2種類の墓を作ったという。肉体は不浄なものだから、山野に放棄し、野ざらしにして朽ち果てるにまかし、住居の近くに「霊・靈魂」のための墓を作ったという。）そして、清まって神、すなわち「祖先神」となると考えたという。）

4. 3 「祖先神信仰」に生きる日本民族

日本民族個々人は、現実的な日常生活場面においては、歴史的には、それぞれの「いえ」の「祖先神」への「信仰」に生きてきたのである。その場合、祖先（神）と子孫との関係は「恩」と「報恩」との関係で結ばれていたのである。「恩」とは、祖先の残してくれた遺産としての田地田畑・祖先（神）加護による家内安全・五穀豊穡である。「報恩」とは、祖先の「恩」に対する子孫の時節毎の祖先の霊（祖先神）に対する供養、すなわち「祭り」である。子孫は、供養する子孫を絶やさないと更に子孫を残す。これが伝統的な日本人としての「生き方」であり、「生きがい」なのである。（したがって、子供を産むことは、決して趣味の問題などではなく、日本人としての人倫なのである）（古来から、「水」と「安全」が無償であった日本人にとって「まつりごと」は「政治」ではなく、「祭り・祀り」なのである。今更「政治感覚」の欠徐を悔やんでも仕方がないのである。）村の祖先の霊は、山に常駐し、「山の神」となっているが、農繁期には田畑の畦に進駐し、秋祭りによって山に帰還し、農閑期は山籠もりした。やがて「氏神様」となって「氏神社」に常駐するようになったのである。

4. 4 記紀神話における国家神道

日本民族全体としての宗教である「神道」、あるいは、明治政府の樹立に伴って構築された「国家神道」は、云うまでもなく「神社神道」における「天照大神」を最高神とする神々の体系

である。

この神社神道の内容は、諸家の説く神道の特徴としての「無教祖」「無教義」「無戒律」「無偶像」を認めるならば、「古事記」「日本書紀」における「神話体系」においてしか把握不可能なのである。「記紀」が少なくとも、現存する日本最古の歴史書であり、神話が記述されている唯一の書であることは明らかである。よって、記紀神話における神々についての考察によって天照大神の本性についての解明する作業を飛鳥ら²⁾に基づき、以下に行うことにする。

5. 「天照大神」の本性

5. 1 「天岩戸開き」神話

5. 1. 1 神道の最高神「天照大神」の正体解明の手段

1. 日本民族の宗教である「神道」の最高神「天照大神」の正体、換言すれば、本質、あるいは天照大神を最高神たらしめている「もの」は？
2. 「神道」、記紀神話において記述されている→記紀神話の深層の意味の解明

5. 1. 2 「天岩戸開き」神話

天照大神の本質・本性は、「天岩戸開き」神話において示されているので、以下において、「天岩戸開き」神話を考察することによって、天照大神の本性を明らかにしたい。

5. 2 「天岩戸開き」神話のこれまでの4つの解釈

従来からの「天岩戸開き」神話に関しては、これまで以下のような4つの解釈がなされてきた。

5. 2. 1 冬至の日の盛大な祭り

「天岩戸開き」神話は、太陽神である天照大神の冬至の日の祭りを象徴したものであるという解釈である。天岩屋籠もりは、冬至の日における太陽の「死」、そして、岩屋から出ることによってまた太陽の光が強くなっていくことを象徴しているとの解釈である。

西洋においても、元来、クリスマスは冬至の祭りであり、太陽神の復活に祈りを捧げる冬至の儀式であったという。イエス・キリストが12月24日に出生したことが嘘であることは、常識となっている。

5. 2. 2 皆既日食

弥生時代の後期において、日本では4回の日食があったという。AD247年の日食は皆既日食であったという。「月」によって「太陽」が隠されるわけであるが、このことが、「月」(=月読命=スサノオ命)の運行(=暴行)によって、「太陽」(=天照大神)が隠された(殺害された)(天岩戸への逃避)という「天岩戸開き」神話で表現されているとの解釈である。

5. 2. 3 邪馬台国における「卑弥呼」から「台与」への交替

定説としては天照大神は邪馬台国の女王卑弥呼(=日巫女=太陽崇拝のシャーマン)の投影とされている。したがって、天照大神は女神ということになる。本論文の目的は、天照大神は、イエス・キリストの投影されたものであることを以下において考察するものである。(当然、天

照大神は男神ということになるが、このことについては、本論文では触れないことにする。）

「魏志倭人伝」によれば、卑弥呼は、邪馬台国と狗奴国（くなく）との戦争で狗奴国の王・卑弥弓呼（ひみきゆこ）に殺害された。あるいは、老衰による死ともされている。

卑弥呼の後継者として卑弥呼の親類の娘・「台与（とよ）」が選ばれたという。卑弥呼の死と台与の即位が、「岩戸開き」神話による表現であるという解釈である。

5. 2. 4 ギリシア神話の投影

騎馬民族・扶余族の大王・「真沸流」（神武・崇神・応神天皇）によって大和朝廷が成立したという。扶余族は世界最古の騎馬民族スキタイの流れを汲むという。日本神話にはスキタイ神話の残存が見られるという。スキタイ族の神話はギリシア神話に最も類似しているという。この観点からギリシア神話の「大地母神デメテル」物語・「デメテル・ポセイドン」物語などが投影されたものが「天岩戸開き」神話であるという解釈である。

5. 3 イエス・キリストとの類似性

イエス・キリストを天照大神に投影し、「天岩戸開き」神話を創作したという解釈が成立する根拠として以下に、イエス・キリストと天照大神との類似性を指摘する。

5. 3. 1 「光」の神

イエス・キリストと天照大神との最も本質的かつ重要な類似点は両者が「光の神」であるということである。イエス・キリストは「聖書」においては「光の絶対神」として考えられており、以下のように解釈されている。

- (1) イエス・キリストは「神」であり「神」は「光」である。従って、イエス・キリストは「光」
- (2) 「ヨハネによる福音書」第8章第12節に「私は世の光である——」
- (3) イエス・キリストは「世の光」であるという表現は レトリックとしての光であるという以外に自然科学的な光そのもの
- (4) イエス・キリストは輝く光であり、光はイエス・キリストである。
- (5) 天地創造にあたって、絶対神が最初に創造したもの、それが「光」であり、全ての存在の根源に存在するものが「光」である。
- (6) イエス・キリストは、体全体が発光している。「マタイによる福音書」第17章第2節「——顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった」。顔が太陽として輝き、世界を照らす光それが「イエス・キリスト」

天照大神（＝天照御大神＝光の神）も以下のように解釈されている。

- (1) 単なる太陽の神ではなく「天照」即ち「天を照らす」ものであり、「照らすもの」は「光」である。したがって「天照大神」は「光の神」、つまり、「世をあまねく照らす光」の神である。
- (2) とすれば、イエス・キリストの性質そのものである。

5. 3. 2 太陽との関係

- (1) イエス・キリストの象徴としての「太陽」。イエス・キリスト（＝光の神）の力によって

「太陽」が「光」を生成せしめているから、「太陽」はイエス・キリストの象徴となるのである。

(2) 天照大神の正式名はイエス・キリストを表現している。

「天照 国照 彦天火明 櫛瓊玉 饒速日命＝あまてる くにてる ひこあめのほあかり くしみかたま にぎはやひのみこと」の意味は「天上を照らし この国 地上をも照らし 燃えさかる火の明かり と 聖なる御魂によって 永遠の命をもたらす太陽の光にして消えることのない絶対的な光の神」であり、イエスの場合と全く同じである。

5. 3. 3 処刑

イエス・キリストが処刑されたことは云うまでもない。同様に天照大神も処刑されたのである。

イエス・キリストの処刑

イエスが磔にされたときの十字架が厳密には「T字形」の「木」であり上に「罪状書き」を付加するので十字形に見えたのである。「木」は、「榊」であったという。

天照大神の処刑

(1) 「死」＝「お隠れになった」

古来日本では、天皇の「死」は、「お隠れになった」と表現してきた。よって 天照が天岩屋に「隠れた」とは、死んで横穴式墳墓に埋葬されたことを意味するのである。

(2) スサノオ命による天照殺害

このことは、以下のことから推察できる。

スサノオ命の悪行によって、「古事記」では、「天服織女（あめのみそおりめ）」機織りに機械の一部である「ひ」によって性器を損傷され死に至ったとある。「日本書紀」では、一書には、「天照」の分身である「稚日女尊（わかひるめのみこと）」、一書には、天照自身、死に至ったとある。

(3) 処刑

「天岩戸開き」神話において、天照が岩の扉をそっとあけて外の様子、を窺ったとき、榊の木に吊された「八咫鏡」（＝やたのかがみ）に自身の顔が映ったという出来事があったが、この事件は天照大神が木の枝に吊されて「処刑」されたことを象徴するものである。

天皇家の三種の神器の一つに「八咫鏡」があり、最重要なものであり、現在も、伊勢神宮内宮にあり、天照の神宝で天照大神の分身・天照そのものとされている。したがって、鏡に映った天照とは当の本人そのものであり、それが榊の枝に吊されているから上述のように解釈できるのである。（ユダヤ人原始キリスト教エルサレム教団のユダヤ（＝イエフダー）の名の「秦氏」によって創作された「天岩戸開き」神話とされている。）「榊」は神聖なる樹木で 神社には必ず植えられている樹木であり、天照は、イエス・キリストが磔にされた木・神聖なる樹木「榊」に掛けて殺されたのである。

5. 3. 4 暗黒の因

天照大神の場合

天照大神が岩屋戸に隠れたとき、地上は暗闇になったというが、その「暗黒の因」について、従来からの定説では、「日食」が指摘されているが、この考え方は明らかに間違いである。大体、日食ぐらいで神話のクライマックスとするのはおかしい。AD 2 - 3 Cの間に、日食は4回生起

している。従って、古代人にとっても日食はそんな珍しいことではなかったはずだ。神話に残る以上、もっと重大な当時の人間に一大ショックを与えるような事件であったはずだ。「古事記」では、その暗闇が「常夜（永遠に続く夜の意味）が続いた」。つまり、それほどまでに暗闇の時間が長かったという。卑弥呼の支配時代のAD247年の皆既日食では、その持続時間は十数分というから、この程度の日食では事件にならない。真つ昼間に突如、暗闇となりそのまま数時間も持続したことは、歴史的記録にはあるという。原因が日食ではないことは明らかであるが、その真因が不明である。

イエス・キリストの場合

AD33年、パレスチナで「消光事件」（時間は12：00－15：00。日本時間では、19：00－22：00）が即ち、イエス・キリストの絶命直前に「太陽の消光事件」が生じたという。「ルカによる福音書」第23章 第44－45節 「——12時頃、全地は暗くなり、15時まで続いた、太陽は光を失った」。つまり、日食ではない。太陽が隠れたとは記されていない。即ち、「太陽の消光事件」である。（現代の最新の宇宙科学的知見によって、この消光事件の原因を説明することは可能である。）天照の場合も、イエスの場合と同じような「消光事件」なら神話に記録される可能性がある。以上のことから、暗黒の因が「日食」ではないという点で両者は共通している。時差の関係でパレスチナの「消光事件」は時間的に日本では生起し得ないので、イエス・キリストの事件が天照大神の神話に投影されたと考えられるのである。

5. 3. 5 「鶏」

天照大神の場合

神社には必ず鶏が飼われているが、鶏は神遣で、太陽（＝天照）を導くという。「天岩戸開き」事件において、天照を岩戸から引っ張り出すために神々がいろいろと集めたもの一つに鶏があった。「思金（オモイガネ）神」が集めてきた「常世国の長鳴鳥」を天岩戸の前で鳴かせた。鶏が太陽が出る直前に鳴いて太陽を呼び戻す性質を利用したのである。

イエス・キリストの場合 ペトロの鶏

あまりにも有名な話であるが、イエスが12使徒の筆頭・ペトロに対して「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、3度、私のことを知らないと言うだろう」。ペトロの裏切りの発言の直後に「鶏が鳴いた」という事件である。

5. 3. 6 「女性」の存在 マグダラのマリアと天宇受女命

イエス・キリストの場合 マグダラのマリア

イエス復活の時、その場にいた女性たちの一人で、娼婦でかつて姦淫の罪に問われたことがあった女性である。イエス復活後、最初に出会ったのがマグダラのマリアであった。この時は、すでにイエスの妻になっていたとも云われている。

天照大神の場合 天宇受女命（あめのうずめのみこと）

天照の「岩戸開き」の場合は、天宇受女命が、最も身近な女性であり、最初に天照に声を掛けた存在であった。彼女が「裸で舞った」ことは、彼女が「性的存在」であったことを示唆するものである。彼女がイエス・キリストの場合のマリアに匹敵する存在であることは明らかである。

宇受＝ウズ、からの連想される「ウズマサ」は、ユダヤ人原始キリスト教徒の秦氏においては、彼等の首長の「ウズマサ」（したがって、京都の「太秦」は、日本に到来した秦氏の首長が居住

した地であることを示すものである。)に通じる。「ウズマサ」は アラム語で「イシュ・マシヤ」＝「イエス・キリスト」である。したがって、「ウズ」＝「イエス」で「天宇受女命＝イエスの女」となる。

5. 3. 7 「墓」の類似性 「横穴式墳墓＝天岩屋のイメージ」

イエス・キリストの「墓」は「横穴式墳墓」で入り口は大きな岩の戸でふさぐものである。天照の「岩屋」も単なる洞窟ではなく、密室状態の横穴で古代においては岩戸付きの横穴で「横穴式墳墓」であり、両者は一致する。

5. 3. 8 イエスの復活と天照大神の再出現

ルネサンス期の画家ラファエロは、全体に岩屋のようでその岩戸が開いてそこから光り輝くイエス出現する絵を描いているが「天照大神の岩戸開き」のイメージに一致する。キリスト教徒が抱くイエス・キリストの復活の様子は 光り輝く2人の天使が出現し石をわきへ転がし、そこにイエスが墓から復活するのである。天照大神の場合は、イエスの天使に替わって怪力の持ち主の「天手力男（アメノタチカラオ）神」「布刀玉（フトダマ）命」の2人の神が岩戸をこじあけて、そこに天照大神が再出現するのである。

以上のように考えられるので、ここにイエス・キリストと天照大神との類似性を主張できるのである。したがって、本論文においては、この両者の類似性を主張するものである。

6. 次の課題

本論文においては、以上のように「天照大神」と「イエス・キリスト」との類似性が指摘された。次の課題として、次報（第二報）において このことの妥当性を傍証する予定である。

参考文献

1. 村上重良「国家神道」岩波書店、1970年
2. 飛鳥昭雄・三神たける「失われたイエス・キリスト「天照大神」の謎」学習研究社、1998年
3. 湯浅泰雄「神々の誕生」以文社、1972年
4. 塹江清志 他「精神構造の規定因としての「自然」」名古屋工業大学紀要 pp.187-192 Vol. 51, 1999年
5. 木村 敏「人と人之間」弘文堂、1972年
6. 河合隼雄「Jung心理学入門」培風館、1967年
7. 塹江清志 他「「一体感」と「断絶感」」名古屋工業大学紀要 Vol. 50, pp.185-190, 1998年
8. 宮家 準「日本宗教の構造」慶応通信、1974年
9. 筑波常治「米食・肉食の文明」NHK、1969年